

平成 28 年度第 2 回印西市教育振興基本計画生涯学習編検討委員会 会議録

1. 日 時 平成 28 年 11 月 24 日（木）午後 2 時～午後 3 時 45 分まで
2. 場 所 文化ホール 2 階 大会議室
3. 出席委員 福留強委員（委員長）、桜井繁光委員（副委員長）、常光康介委員、高城國司委員、篠原年枝委員、谷口由美子委員、對馬由佳委員、
4. 欠席委員 伊藤明生委員、櫻井罔郎委員
5. 事務局 生涯学習課 飯島課長、関口、五十嵐
山崎教育総務課参事
6. 傍聴者 なし
7. 議 事 (1) アンケート調査報告書について
(2) 教育振興基本計画第 1 次素案について
(3) その他
8. その他 (1) 今後のスケジュールについて
(2) ご意見シートについて
9. 議 事 録 要点筆記

議事（1）

～事務局より（1）に関する資料説明

委 員：生涯学習の認知度が低いというアンケート結果が出ている。現在どのような周知を行っているのか教えてほしい。

事務局：主に広報やホームページで周知している。市民アカデミーの募集は町内の回覧にチラシも入れている。また、講師や講座を紹介する冊子を公民館や市の出先機関の窓口に置き、事業によってはポスターなどを制作して PR している。

委 員：認知度が低いということは、周知がまだ足りないということなのか。

委 員：生涯学習に興味や参加したい方もいるようだが、広報やホームページ、冊子の中身を見ていないということもあるだろう。

委 員：最近では新聞を取っていない人も多く、新聞折り込みの広報を見ていないこともある。学びの場や子育てサークルなどで活動をやっているが、それが生涯学習という言葉と結びつかない方もいると思う。こうした傾向が、生涯学習を「聞いたことがあるが、内容はよくわからない 53.9%」という数字に表れている。「生涯学習」というと、どうしても固い言葉として受け止めてしまう。

委 員：生涯学習という言葉自体の幅が広すぎて、私自身もわからない。市民アカデミーの講座だけが生涯学習と思っていた。行政が把握できていない活動で、地域に集まって行っていることもある。生涯学習の定義がわからないため、やっけていても、やっけていないという方が多いと思う。

事務局：市民が行っているすべての活動が生涯学習に含まれる。市民の活動を支えることが

生涯学習に対する行政の役割と考える。また、生涯学習で培われた市民の能力や経験を地域づくりや将来を担う子どもたちに活かしていただきたいと考える。

委員：我々自身、生涯学習がわからない。アンケート結果でも半数以上がわからないという現状もある。したがって、この現状を委員の共通認識として、今後の議論を進めたい。

委員長：アンケートで質問が4つの分野に分かれているため、市民の中には公民館の講座だけが生涯学習だと解釈した方もいたと思うが、実際はもっと高い割合が出てくるはずである。

生涯学習は生活全般にかかる学習であり、スポーツも文化芸術も、教育や家庭教育もすべて生涯学習に含まれる。「いつでも、だれでも、だれからでも学ぶことができる」のが生涯学習の基本であるため、一般的には民間の活動も入ってくる。こうしたことを踏まえ、生涯学習をどのように啓発するかが重要であり、学習情報提供の相談室も必要となる。

日本全体でも、印西市でも8割以上が何らかの生涯学習を行っていると思う。生涯学習で自分を高めることで印西市も高まることになり、これがまちづくりにつながっていく。さらに、生涯学習を経験している人たちの中で、まちのために貢献したいという人が25%もいる。通常はあり得ないぐらい高い割合となっている。

総じてアンケート結果は妥当であり、課題も提示されていると感じる。次の計画にも関連するので、計画素案に進みたい。

議事（2）

～事務局より（2）に関する資料説明

委員：「第一節 計画策定の背景と趣旨」では、学校教育、生涯学習、スポーツ、文化芸術分野と分けている。4つの分野すべてが生涯学習なので、誤解を招く恐れがある。

事務局：委員のおっしゃる通りだが、今までは分野毎に計画があったため、今までの経緯を踏襲して4分野別に記載しているのご理解いただきたい。

委員長：4分野の検討委員会があり、これらを統合すると生涯学習になる。これまでの経緯を踏まえて、4つの分野に分けた表現にならざるを得なかったということである。

委員：この計画素案にはアンケートの市民意向が反映されていない。計画が従来と同じような表現になっており、新しさが全くないと感じる。市民がこれを見て、従来と同じだと思えば、進展がない。

極端に言えば、従来通りのことは記載せず、市民意向を盛り込んで新しいことのみを記載するぐらいを考えたい。アンケート結果からの課題として、新しいプログラムやe-ラーニングなどがあったので、そういうことを盛り込みたい。

仕事が忙しくて、なかなか時間が取れない場合もe-ラーニングで対応できる。コーディネイターのことも入れてほしい。

事務局：アンケート結果と委員会からの意見を検討し、「第4節 リーディング施策」に新し

い内容を盛り込んでいきたい。

委員長：「主な取り組み」や「取り組み概要」に具体的な新しい事業名を盛り込むと、計画がイメージでき、どの時期に、新しい事業をやらなければならないか見えてくる。

事業をやるかやらないかはその時点の体制にもよるが、ダイナミックなことを提案していきたい。担当職員が異動しても継承できるよう、どこにもない印西市だけの事業を計画に盛り込むことが大事である。

委員：小学生から効果的に取り組む英語教育の環境づくりの推進が記載されている。こうした事業があると計画も具体的になる。

委員：素案の中に、事業内容の重複も散見される。「生涯学習情報の提供」の方向として「より多くの人に、時間・場所を問わずに生涯学習などに関する催しやガイドの利用状況などをホームページでもう少し発信して活動をPRする」といった積極的な内容に修正した方がいい。

委員：計画全体にストーリー性がない。「総合計画」との整合性から、そのまま盛り込まなければならない項目もあるが、市民が見た時に印西市の教育の内容がすぐには理解できない。なるべく、分かりやすく、やさしい言葉で表現してほしい。

委員長：前回の計画では、計画のハイライトをまとめていた。そういう工夫もしてほしい。

委員：アンケートの考察で記載されている「個人と地域の中間のつなぎ役となるコーディネーターやカウンセラーの育成などを、関係団体と協力しながら取り組むこと」が重要である。印西市の市民アカデミーに参加すると指導員の資格が取れ、個人と地域とのつなぎ役として活躍することができるようになれば、市民も積極的に参加する。こうしたシステムづくりを考えてほしい。

委員：周知、集客に関する職員の意欲と前向きな情報収集、市民団体への働きかけの工夫なども必要である。

委員長：職員が理解していないと進まないため、「職務研修」が重要になる。「第1節 計画の推進体制」に、職員の研修を強調して盛り込みたい。必要なことがほぼ網羅されている良い計画だが、「これが印西市だ」ということをどこかで工夫したい。

委員：全国の社会教育大会の分科会に出席したが、そこで紹介された事例はそのまち独特のものだった、印西市でも「こんなことを目指している」という明確なものがあれば、市民も夢が持てる。

委員長：「学びの心」を強調したい。旧印旛村ともうひとつの街が別々にあるような気がする。もっと印西市の特徴を強調できたらいい。

委員：基本理念のキャッチフレーズは、「(仮称) 学びあい、笑顔で未来を拓く いんざいの教育」の「笑顔」を先にした方が語呂が良い。

事務局：基本理念はたたき台である。より良いキャッチフレーズを委員会で考えていただきたい。また、団体の意向調査からの意見も基本方針に反映させていきたい。

委員：アンケート結果にある「生涯学習への意欲はあるが得た知識を発揮する場所がなく、ジレンマに陥っている」という意見を解決することも課題である。

最も重要なことは「生涯学習の認知度を高めること」、さらに「生涯学習を受けた

人に対して、活躍する場所をつくること」である。以前から住んでいるシニア層の中にも能力を持っている人がいるので、そうした人たちの能力を活用できれば良い。

幼児から高齢者まで市民全体にわたって、講師やアドバイザーなどの指導を受けられるシステムづくりも必要。加えて、新しい住民の活躍の場を考えていただきたい。

事務局：「リーディング施策」のひとつの仕組みづくりとして、学校教育、生涯スポーツ、生涯学習、文化芸術の間に「学びのためのコミュニティ」を記載している。これは形骸化している「さわやかコミュニティ」を復活させ、これを核として、生涯スポーツや文化芸術の団体、市民アカデミーなどのそれぞれの分野で活躍されている、あるいは能力のある人材をデータ化していく考えである。

集まった人材をベースに、中学校区におけるモデル地区を設定し、学校との連携や人づくり・地域づくりに向けた「学びのためのコミュニティ」を形成し、コーディネーター役も設置する。そして、学校教育において必要な学校と地域・家庭が連携・協力する地域の仕組みを構築し、学校の放課後、休日、夏休みなどに、指導を行うなど資質を発揮していただきたい。

また、今回の計画は、新しい仕組みづくりの最初のステップであり、次期計画の33年度からはステップ2、その5年後のステップ3というように、長期的な視点で実行するための仕組みづくりも行いたい。

委員：モデル地区で実際に事業をやることで、市民にもイメージがつかめる。

委員長：記載された取り組みを見ると、現在もすでにやっていることが多いので、さらに工夫してもらいたい。

例えば、印西市の市民アカデミーは教養や文化の講座に留まっていると思う。市民アカデミーで学んだ人を活かすための事業が必要であり、生涯学習で学んだことで仕事につながっていくことを研究していくことが生涯学習の大きな課題である。

そうした事業のひとつの事例が市民大学になる。市民大学での学びは、専門性があるため、議員も学ばなければならない。そこで学んだ議員の提案なら自治体は絶対動く。議員も市民として勉強しなければならない。市民大学の役割はこうしたものである。

また、印西市はまちを積極的にPRする姿勢が弱いように感じる。どのくらいの人を来訪させるか、どんなことをPRするかは、生涯学習課にしかできないことである。

現在の計画は穏やかな内容である。いきなりインパクトのある計画はできないが、キーワードを散りばめておき、毎年計画を見直し、優先順位に従って実施していくことで計画を実行できる。そのため、必要なことをここに盛り込んでおくことが重要である。

委員：「学びのためのコミュニティ」の人材バンクについて、現状との違いはなにか。

事務局：具体的なことはこれから詰めていくが、生涯学習ガイドや地域情報などを通して、必要な人材を集めていきたい。

委員：公民館やコミュニティセンターなどの位置づけはどうなるのか。

事務局：「学びのためのコミュニティ」の核は公民館なので、今後、記載したい。

委員長：今回は活発な意見交換ができた。次回の修正案でさらに議論したい。

議事（3）

～事務局は特になし

委員：公民館活動では、旧地域とニュータウン地域の意識の格差を感じているが、アンケート結果では地域の傾向はどうだったか聞きたい。事業をした場合、ニュータウン地域の方が人が集まるため、そちらを利用しているが、駐車場などの問題もあるため、旧地域の公民館などを利用した方が便利だとも思う。

事務局：旧地域、ニュータウン地域、それぞれが含まれている地域という3つのカテゴリでの集計結果から、例えば、回答者で「30代が多い」「居住歴が5年に満たない」「就学前の子どもと同居している」の割合が多いニュータウン地域では、「地域の小中学校に関わりたいという意向」が他地域よりも高い。また、「イベント情報がほしい」はニュータウン地域でやや多かった。大きな差異とは言えないが、地域によって若干の差が見られた項目もいくつかあった。

委員：本埜公民館は交通の便が非常に悪く、コミュニティバスもないため、自分の車で行かなければならない。こうした不便さは、アンケートでは見えていない。年齢の高い方が多いため、通えずに、辞めてしまうケースも多い。また、震災で本埜公民館が使えなくなったため、他の公民館に移動し、結局そちらが便利なのでそちらに通ってしまい戻らなくなり、活動を廃止せざるを得なくなったサークルもある。

館内の部屋数は多いが、活用されていないことも多い。そのため、文化祭も盛り上がり、合併前と比べて、活動が縮小したと実感している。協議会でも問題になっているが、この状況をどの課に報告したらいいのかわからない。

委員：本埜公民館へのコミュニティバスは運行するべき。

事務局：社会教育団体に公民館についての意見を聞くための調査票を出したが、回答が得られなかった。公民館担当がいるので相談してほしい。

委員長：沢山の意見がでた。これで本日の議事を終了する。

<その他>

～事務局よりスケジュール、ご意見シートを説明

◇ご意見シートは、1週間を目途に各委員から事務局への提出を依頼

使用した資料

- 印西市教育振興基本計画に係るアンケート調査報告書　－結果概要と計画への考察－
- 印西市教育振興基本計画第1次素案
- 印西市教育振興基本計画第1次素案(説明資料)

- 印西市教育振興基本計画に係るアンケート調査報告書
- 用語表記一覧
- 会議後意見シート

以上

平成28年度第2回印西市教育振興基本計画生涯学習編検討委員会の会議録は、事実と相違ないので、当会は、これを承認する。

平成29年1月13日

印西市教育振興基本計画生涯学習編検討委員会

署名委員 _____